



Mrs. GREEN APPLE

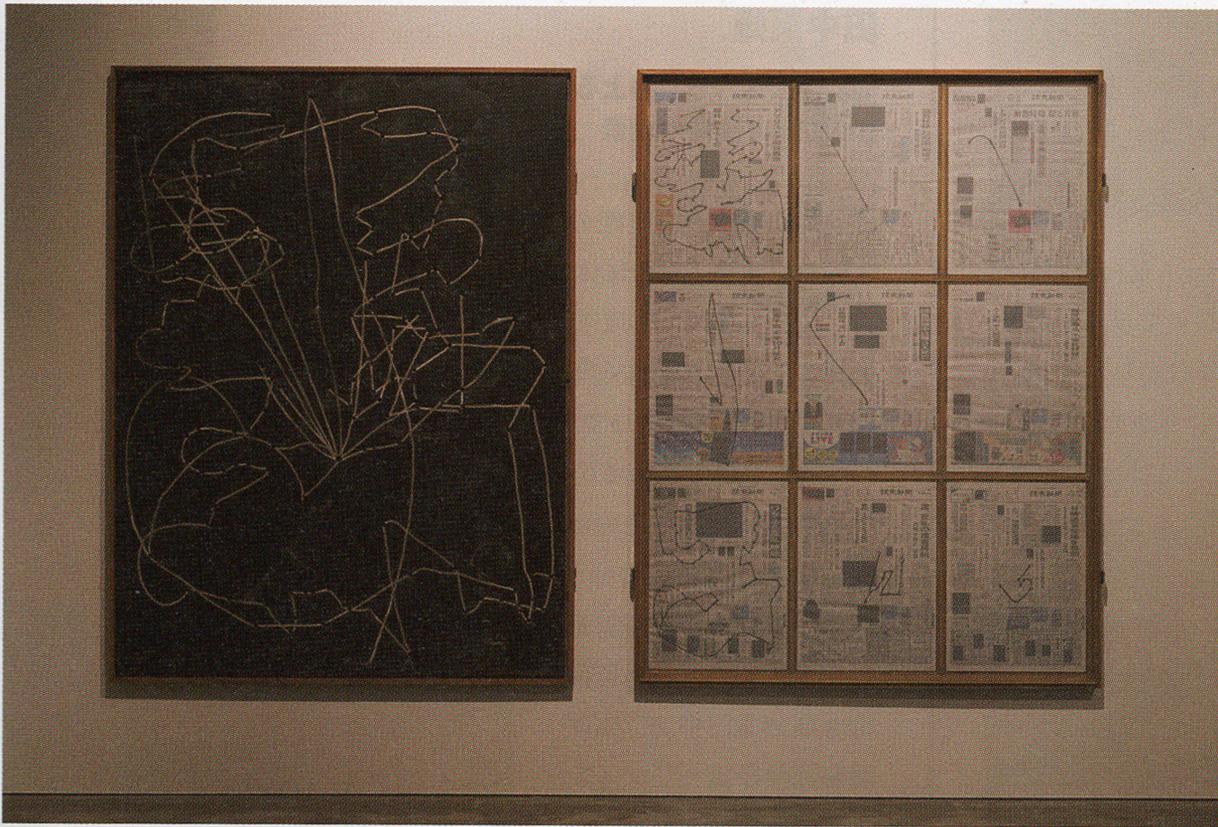
3人がたどり着いた
10年目の現在地

6 NO.243
JUNE 2025



GQ
CREATIVITY
AWARDS
2025

創造力で世界を動かす



《202306020911141522262830》グラファイト、オイルパステル、パラフィンワックス、アクリル、新聞紙、木製パネルに額装 2023年

BIEN

鑑賞者に解釈を委ね
ものの見方を問う



アニメや文字、記号の輪郭などをなぞり直し、その意味を解体・再構築した平面作品、そして映像や彫刻、インスタレーションなど多様なスタイルで知られるBIEN。近年は他者に参加を促すような作品も展開する。写真は日本橋馬喰町のアートギャラリー PARCEL で開催した個展『PlanetesQue: The Case of B』の風景。これはボードゲームのような作品で、展示ごとに異なるプレイヤーが、家型の箱の中にある説明書とサイコロの目によって空間内にオブジェクトを配置するというもの。本展では、BIEN 自身が実行した展示空間を見せた。展示や作品のあり方を変え、ものの見方を揺さぶるBIENらしい実験作だ。

森 夕香

日本画の技法で描かれる
溶解し融合するような身体



美大で日本画を学んだ森夕香が描くのは、有機的なフォルムをした身体のようなもの。その境界は流動性を帯び、他の身体や外側の環境と混ざり合っ、互いを内包しているようだ。こうしたイメージは、自身の身体感覚や経験を反映したもの。比叡山の麓で育ち、仏教の教えが身近にあり、能楽師・安田登の著書『日本人の身体』にも影響を受けたという。2019年からは、植物の身体性を想像することで生まれた作品も発表。昨年開かれた『森の芸術祭 晴れの国・岡山』での展示も話題となった。また、ファッションブランドのヨウヘイ オオノとコラボを行い、2025年フォールコレクションで絵画をプリントしたドレスが登場した。



《融合と変容》木製パネル、和紙、日本画顔料 2024年

山田康平

色のレイヤーが作り上げる
フラットながら奥行きのある絵画



抽象的な絵画作品で注目を集める山田康平。その制作にはルーティンがある。まずキャンバスにたっぷりオイルを染み込ませ、画面の左上から黄色の絵の具を載せていく。それは古典的な絵画が、光の設定を重視して描かれていたことに由来するものだ。その後、画面にブラシを使って色を幾重にも重ねていくのだが、はじめの黄色は画面に残ることも、他の色と混ざりしみとして現れることも。そうやって思わず覗き込みたくなる絵画が完成するのだという。近年は多方面に関心を向け、建築家の松井陸とともにAWASE galleryを設立。6月、新宿にオープン予定の「nudge field」を拠点にそのディレクションも行う。



《Untitled》キャンバス、油絵の具 2025年